うすい貝殻

重兼芳子

文藝春秋

うすい貝殻

重兼芳子

文藝春秋

著者略歴

昭和二年北海道砂川市に生れる。福岡県立田川高女卒業。五十四年七月、「やまあいの煙」で第八十一回芥川賞受賞。主なる作品に、「水位」「ベビーフード」「地層」「同居人」「髪」等がある。

うすい貝殻

昭和五十五年十月十日　第一刷

定価　千二百円

著者　重兼芳子

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話（〇三）二六五―一二一一

印刷所　大日本印刷

製本所　和田製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©YOSHIKO SHIGEKANE 1980

Printed in Japan

目次

第一章　繁殖……5
第二章　侵蝕……109

装釘　平野甲賀
撮影　田辺幸雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うすい貝殻

第一章　繁　殖

部長社宅には荷物の方が先に着いた。前任の部長の家族が一カ月前に引越してから、あとの畳替えや襖張りなどにかなりの日数がかかった。会社の営繕部の方から人がきて風呂場の簀子まで新しくなったあと、新部長の荷物が着いたのだった。荷物が着く前に加代は社宅の奥さんたちと、押入れの中から台所の隅まで掃除をした。

部長の荷物はトラック三台に高く積みこまれてあった。男手は会社の物資部の若い連中だ。荷降しはその人たちが掛け声をかけながらやり、やはり物資部の年配の男たちが塀の中に運び入れた。荷物は筵で包まれ木枠の中に入れてあり、その上を荒縄で縛ってある。

庭に筵を何枚も敷いてそこに次々と荷物を運ぶ。鎌で縄を切り木の枠から中のものを取り出し筵をほどく。そこまでは男たちの仕事だ。加代は前に後にまつわりつく一夫を叱りながら、箱の中からさまざまな家庭用品を家の中に運び入れるのだった。

加代がこの社宅に住むようになったのは一カ月ほど前である。夫の隆二が春の異動で土木部の通運課から物資部に移り、資材課の倉庫係長の辞令が降りた。社宅は役付きでないともらえない。家賃の高い民間アパートから、三分の一の家賃で済む社宅に移れたことと、夫の給料も上ったこ

とで家計はぐんと楽になった。社宅は各部ごとにブロックになっていて、各ブロックどうしの往き来はあまり無い。ブロックの中で最も大きいのは部長社宅だ。高い塀がめぐらされてあり、庭には枝ぶりのよい木が植えてある。加代は引越しの手伝いをして、はじめて部長社宅の隅から隅まで見たのだが、縁側の板敷きも床柱も、それに押入れの中の仕切りまで、使っている木の材質が他の社宅とは全く違うのだった。

前に住んでいた民間アパートは、バラックより少しましな程度の隙間だらけの建物だった。大がかりな空襲の跡地に戦後すぐ建てられたので、土を掘ったら人骨が出てきたなどとささやかれていた。加代は九州から上京してきたばかりで、隆二が出勤した間は身をすくめるように室にこもったきりであった。一夫が生まれ九州弁の加代も、どうにか標準語に近い発音ができるようになっていた。ラジオで聞く流行歌をすぐ覚えるたちなので、言葉を覚えるのも早かったのだろう。

朝鮮動乱の特需が会社に直接影響を及ぼしたわけではないのだが、景気はほぼ上向きになっている。それに戦後何度もやってきた大型台風のせいで、日本中の河川や道路は大荒れに荒れている。政府は公共事業に予算を大きく組んだので、会社もかなりの仕事をもらえそうだと隆二が新聞を見ながら話していた。加代は安心して社宅での生活をはじめたのだった。

加代の家は二軒続きの社宅で、部長社宅の半分もない小さなものだ。それでも前にくらべるとずっと広い。念願だった風呂もついているし、古くなって壊れたところは会社が修繕してくれる。全国に支店を持つ大きな建設会社に隆二が勤めているお陰だと、加代はありがたくてならない。

住宅事情はどこへ行ってもきびしくて、民間アパートに入れただけでも幸運だったのだ。一軒に五所帯同居などというのはざらで、結婚したくても住む家がないという話をよく聞いている。隆二が係長になってくれたことで風呂つきの社宅に入れたのだと、加代の感激は一カ月経っても

まだ続いている。

切りつめるだけ切りつめていた家計も、少しは息がつけるようになった。会社までは通勤一時間半はかかるが隆二は少しも苦にはしない。東京の近郊といっても畑や空地が多く、近くの店は社宅の人の購買力で成り立っている。一通り生活に困らないだけの店は近所にある。

荷物を降し終えると大きな音を響かせてトラックが帰った。二軒続きの隣に住む信子が、木箱の中からわれものを取り出している。

「加代さん、こっちに来てお茶碗出すの手伝ってよ。部長さんの御家族が着いたら、その日からすぐ要るものばかりなの。」

と手招きして言った。

「一夫が離れないの。そっちへ行って茶碗でも割れば申し訳ないから、あたしお風呂の掃除している。」

加代は一夫の手を引き据えて風呂のタイルを磨いていた。引越しの活気は一夫を興奮させるのか、珍しいものがあると手に取ってみるので危くて仕方がない。一夫に水遊びをさせながらしゃがんで風呂場を掃除するのが最も安全な手伝いだった。信子のところにも四歳と二歳の女の子がいるのだが、今日の引越しの手伝いのために、実家から母親を呼んでみてもらっている。

引越しの手伝いは強制されるわけではない。上の人から頼まれた覚えはないし、部長の荷物が何日に着くと教えてもらったこともない。しかし前の部長が引越して行ったあと、社宅の奥さんたちの間でさまざまな情報が飛び交い、荷物が着く正確な日時がささやかれていたのだ。信子は早手廻しに実家の母親を呼ぶ手配をしたし、おおかたの奥さんたちは手を空けて待っていた。加代も前の夜は一夫を早目に寝かせて睡眠時間をたっぷりととらせた。眠いと一夫はすぐにきげん

が悪くなるからだ。
「糸底が汚れてるねえ。」
台所の板の間に腰を落して茶碗を拭いていた政子が言った。政子は加代の向いに住んでいて夫は定年が近い。給仕からの叩き上げで十年前に係長になった。転勤のために出入りの多いこの社宅に最も永く住んでいるのは政子だ。土地の人が一人もいない社宅の中で、政子だけはこの土地の在の出だ。兄弟が野菜や米を背負って向いの政子の家に出入りしている姿を、ときどき見かけることがある。政子はこの社宅に住んでいた人たちのことを、驚くほどよく覚えている。そして引越しの手伝いをするだけで、新しい上司の家庭のありようや奥さんの性格まで言い当てるのが自慢なのだった。
引越し荷物はあらかた片付いた。あとは新部長の奥さんが着いてから整理すればよいと誰かが言い出して、一服することにした。男の人は庭に面した座敷で、女の人は茶の間で別々の輪になった。
「茶碗の糸底が汚れてるとこみると、今度の奥さんゆったりしたおおらかな方だと思いますわ。」
と政子がさっきと同じことを言った。
「それにしても総桐の箪笥三棹とはやはり違うわねえ。御実家が造り酒屋だそうでお仕度もさすがねえ。」
向うで課長の奥さんどうし話し合っている。一夫が茶菓子に手を出したがるので、加代は恐縮しながら帰ってきた。子連れで手伝いに行ったのは加代だけで、他の人たちはそれぞれの才覚で、よそに預けたり人にみてもらったりしていたのだ。加代は一夫の高く響く声にまで気兼ねして、今日一日で面やつれしてしまった気分になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夕食のとき隆二が、
「引越しどうだった、うまくいったか。」
と聞いた。
「一夫がまつわりついて離れないの。たいして役には立たなかったけど、疲れた。こんなに疲れたことないわ。」
政子が先に立って総指揮をしたこと、それも政子よりずっと若い課長の奥さんたちに、「出過ぎたことをして申し訳ありませんが私が一番古狸だものですから」とあやまり続けたことを話した。「課長さんの奥さん方を差し置いてわたくしごとき者が」とか、「お偉い方の御意見も聞かずに勝手なことを申しまして」と言い訳ばかりしていたのだ。
「信子さんもいつもよりずっと言葉つきが違うの。坐る場所にしても課長の奥さんたちは床の間に近い方に坐って荷物出してるし、わたしや信子さんは板の間に坐ってたの。お台所に近い方にいる方が安心するの。そんな空気なのよ。」
最も気働きがある政子が、なぜ「至りませんで」と言わなければならないのか、加代には分らないのだった。
「おれはこの社宅の中では一番下っ端なんだぞ。会社に行けば部下はいるが役付きの中では新米だ。おれが下だということはお前も奥さんの中で一番の下っ端なんだ。いいか、アパートとは違うんだぞ。社宅に住む以上は地位の序列のとおりに奥さんの序列もきまるんだ。とにかく控えめに、出過ぎぬように、知っていることも知らんと言え。分ったな。」
隆二は何度も念を押した。
新部長は会社には着任していたが、家族が着くのは明日だ。明日は各課長の奥さんたちをはじ

め社宅の人たちが総出で駅まで出迎えに行くことになっていた。
「こっちにこいよ。」
と隆二が布団の中から加代を呼んだ。加代は気が立っていてとてもそのような気分にはなれない。「人のするとおりになにごとも控えめに」と隆二から言い付けられたことが、どこかにひっかかっていた。社宅とはいえ我が家であるはずなのに、家の中まで隆二の職場のような気さえする。最も秘密であるべき寝室まで社宅の誰かに見張られているようで、隆二の傍へ行く気もしない。眠りこけている一夫の布団にもぐりこんで、加代は眠りにくい夜を明かした。

加代は一夫の手を引いてプラットホームに立っていた。隆二からよく言われていたので、なるべく人のうしろに立っていようとした。一夫が珍しがって前に出て行って線路をのぞきこもうとする。やはり今日も子連れは加代一人だった。一夫を連れ戻そうとしてあわててプラットホームの先端に出てゆき、手を引っ張っては一夫ともみ合っていた。加代はいつのまにか自分が奥さんたちの先頭の位置にいることに気がついた。信子や政子はつつましくうしろの方に控えている。この位置はまずい。課長の奥さんたちは降りてくる部長の奥さんに最も近い位置に居なければならない。加代は早く皆のうしろに廻らなければと一夫をひきずるようにして、壁際に退いた。加代の手をふりほどこうとする一夫を、加代は思いきりつねった。大きな声で泣き喚く一夫を奥さんたちは眉をひそめて振り返った。
「もうすぐ部長の奥さんがお着きになるのよ。一夫ちゃん黙らせなさいよ。」
政子が声をひそめてそう言った。
列車が入ってきたので大きな半円のかたちに立っていた人々が、間隔を狭めて小さな半円にな

った。人々の並び方の順序は間隔がつまっただけで前と変りはない。加代は泣きじゃくる一夫の口に掌を当てて、声を洩れさせないようにした。

電車から先に降りたのは、早く着任していて家族を呼び寄せに行った物資部長だった。秘書らしい若い男がさっと近付いて部長が持っていた黒い鞄を受け取った。部長はいばってなんかいないと加代は思った。奥さんたちが怖れるほど見下す様子もないし、むしろ自分の方から手を差し出したりしている。そのうしろから降りた奥さんも質素なみなりをしている。着飾って降りてくることを予想した加代は、ほっとしたのだった。迎えに出ている奥さんたちは、部長に失礼にならないようにとよそゆきのかっこうをしている。列車から降りてきた奥さんのなりを見て、加代の三列ほど前にいた課長の奥さんが、かぶっていた帽子をそっと脱いだ。

あとから子供が二人降りてきた。下の子は一夫と同じ年くらいの男の子だ。人々の視線がいっせいに注がれるのを見て驚いたように眼をみはり、すぐに両親のところに走り寄った。

上の方から一人一人ていねいな挨拶がはじまり、列車の乗降客がそこでせき止められて、迷惑そうな様子をした。挨拶が加代のところまで廻ってこないうちに出迎えの輪が崩れて改札口へと向った。加代はとにかく最後尾についた。この中で自分が最も身分が低いとまだ自覚することはできない。しかし最後尾に体を置いてさえいれば、身分が低いと自覚しているように見えるのだ。人の眼からどう見えるかということにさえ気をつければ、若い人は礼儀知らずだなどと言われなくても済む。

「部長さんの奥さん、やさしそうな方ねえ。何代もお仕えしているけど、気むずかしくなさそうなので安心したわ。」

と政子が加代の方を振り返りながらそう言った。

加代は信子と連れ立ってバスで家に帰った。部長の家族が車に乗りこむのを見送ってからバスに乗ったのだった。

「部長さんの坊ちゃんがさみしがってるから、一夫ちゃんを遊びに行かせてあげてよ。」

と朝、政子が呼びにきた。引越したばかりで朝御飯にも御不自由なさってるだろうから差し入れに行ってきたと言った。

「一夫ちゃんが遊びに来るの、楽しみにして待っているようだったわ。」

隆二がそれを聞いて嬉しそうな顔をした。

「よく顔を拭いて、手足もきれいにしてから遊びに行かせろよ。」

と言い置いて出勤した。

一夫の口のまわりは食べもののかすで汚れている。加代はいやがる一夫の顔を拭いて、こざっぱりしたみなりをさせた。

部長の家の裏口から資材課長の奥さんがそっとあたりをうかがいながら出てくるのと会った。片手鍋を手に持っていて、それを急いでエプロンの下に隠した。加代が挨拶すると愛想笑いを浮べながらすれ違った。政子が朝食を持って行ったと言っていたから、考えることは同じなのだろうか。加代は自分は部長のごきげん伺いに行くのではないと思った。お坊ちゃんの遊び相手がいないそうだし、一夫も友だちを欲しがっている。信子のところは女の子ばかりだし、男の子どうしで遊ばせるのは一夫のためだと考えているうちに、自分がいつの間にか部長の息子を、お坊ちゃんと心の中で自然に呼んでいることに気がついた。そう言えば列車から降りてきたとき、一夫より利口そうな顔立ちをしていると自然に思えた。いつもよその子とくらべるとき、一夫の可愛さばかり眼につくのだ。部長の息子だから利口そうだと感じるのは、やはりどこかがおかしいと

加代は頭を振った。一夫と部長の息子とは対等なので、決して違いがあるわけではないと思った。
「痛いよ。どこへ行くの。」
一夫の手をきつく握りしめ過ぎたのか、痛がっている。
「お友だちのところへ行くの。遠慮することないんだから楽しく遊ばせてもらいなさい。」
加代は力をこめてそう言った。
部長の息子は肇という名だった。奥さんは加代と同年配で加代が引越しの手伝いをしたことも、プラットホームに迎えに出たことも知らないらしかった。部長は永い間独身で年の離れた奥さんをもらったと引越しのとき男たちが話していた。隆二は加代と二つ違いだから部長よりははるかに年下だ。
「一夫ちゃんていうお名前なの、肇をよろしくね。」
とやさしく一夫に言った。一夫は肇を見てはいない。縁側の隅の箱にいっぱい入っている玩具の方に眼をやるなり、そこに走り出して行った。そして赤い消防車を取り上げた。縁側の端から力を入れて走らせると、次に箱の中から縫いぐるみの熊を取り出した。それを放り投げると箱の中に屈みこんで手に持ったのは、大きな機関車だった。
両腕で機関車を抱えこんでいる一夫を見て肇が傍までゆき、
「これぼくのだ。」
と言ってもぎ取ろうとした。一夫は抱えこんで放さない。「これぼくの」ともう一度叫んで一夫の腕をつかんだ。あっと止める間もなく一夫は肇の手の甲にかみついた。加代は一夫の頬を平手打ちにして機関車を取り上げると、あわてて肇に返した。
肇は機関車を放り投げ、奥さんの胸に抱かれて泣き喚いた。

「あらひどい。こんなことされて。」
奥さんの顔が強張っている。
「申し訳ありません。許してください。一夫が悪いのです。薬なにかつけましょうか。」
加代は頭を下げながらもう一度一夫の尻を拳でなぐった。なぐることでしか奥さんの怒りをなだめる方法はないと思ったのだろうか。しくじった一夫に腹が立つばかりで、加代は何度もなぐり続けるのだった。
こんなことははじめてだ。前に住んでいたアパートの近くに、小さな遊び場があって子供たちが群れていた。取ったの取られたので同じ年頃の子供たちのけんかがはじまり、砂をぶつけ合ったりかみついたりする。小さいながら手加減するのか、かみついても血が滲むほどひどくかみつくことはなかった。放っておくと又いつからともなく仲良くなって遊んでいた。
肇の手の甲の歯型も、少しへこんだ程度の軽いものだ。しかし加代は一夫がつけた歯型の三倍くらい、一夫をきびしく折檻した。まるでそうすることで、大人どうしの辻褄を合わせようとしているようだ。あげくの果て一夫を横抱きにして、詫びを言い続けながら引き揚げてきたのだった。
家を出るときには部長の奥さんにうまく取り入ろうなどという気は、全くなかった。しかし眼の前で親の意向と反対のことを一夫にされてみると、せっかくの機会をぶちこわされたような気になった。肇の手の甲の歯型が眼の前にちらついて、一夫を見る眼に憎しみすら加わってくる。加代の見幕に怖れて上眼づかいに顔をうかがっている一夫の頬を、加代はもう一度平手打ちにした。
「君のところのぼうず、なかなか元気だそうじゃあないか」と部長から声をかけられたと、隆二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com